府内の唐人町と関羽

別府史談会　会長　友永　植

昨年十一月に「市外史跡探訪」の企画として、旧大分県芸術会館跡に移設された大分県埋蔵文化財センターを見学しました。大分県の歴史を物語る展示物はいずれも興味をそそるものでしたが、特に私の目を惹いたのが、近世の府内城下の古地図で、それは図中に唐人町という文字を見かけたからでした。

唐人町は中国人が居住した区域であり、今日いうところのチャイナタウンすなわち中華街です。ご案内いただいた吉田課長補佐の解説を聞きながら、ふと頭を過ぎったのは、この唐人町にも「関帝廟」があったであろうか、という思いでした。現在、各地の中華街には「孔子廟」とともに「関帝廟」が設けられ、町のシンボルともなっています。

関帝廟は三国時代の関羽を祀る祠です。ご存じのとおり、関羽は『三国志』の英雄で、「文」の聖人孔子に対して、「武」の聖人として彼の地では古来厚く祀られてきました。彼は蜀・昭烈帝劉備の旗揚げ以来の家臣で、その武勇と仁徳は『三国志演義』が言葉を尽くして語っています。八十二斤（十八kg）の青龍偃月刀を引っ提げ、袁紹の猛将顔良・文醜を白馬津に屠ったくだりなどは、三国志ばなしの名場面といってよいでしょう。劉備が蜀に入った後、関羽は荊州の守備を任されましたが、武運つたなく呉の計略にはまり落命します。『三国志』に付された裴松之の注（裴注所引『呉歴』）によれば、その首は魏の曹操に送られ、関羽と旧交のあった曹操は諸侯の礼を以て葬ったといいます。現在、洛陽に関羽の墓「関林」があります。「林」は聖人の墓を意味し、曲阜にある孔子の墓は「孔林」と呼ばれています。

さて、関羽が中華街に祀られているのには、それなりの理由があります。それは単に「武」の聖人として、「文」の孔子に対置させたということだけではありません。関羽は死後、生前の人となりから人々の尊崇を受け、次第にその地位を高めていきました。彼は武の「聖人」からやがて「神」へと昇華します。すでに隋代に関羽の生地、山西省解県に近い運城県に関帝廟が建設され、唐代には武成王（太公望呂尚）の廟に従祀されました。その後、宋代に崇寧真君、明代には三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君などといった道教神の称号を授けられ、清代に至って忠義神武関聖大帝という鎮護国家の最高軍神に祭り上げられました。さらに興味深いのは、関羽の生地解県が内陸における重要な塩の産地であったことに因縁するものか、特に商人から深く信仰され、彼らの守護神すなわち「財神」としての属性を帯びたことでした。

現在、中華街に祀られている関帝は、もっぱらこの「財神」としてのご利益を期待されているのです。波濤千里の東シナ海を押し渡り、府内に渡来した商魂たくましい中国の商人たちも、きっと彼らの守り本尊として関羽を祀ったに相違ありません。

さて、今年は戊戌（つちのえいぬ）の年。戊は「茂る」、戌は「滅ぶ」に通じ、互いに相反する属性を有するといいます。また、ものの本では、陰陽五行説によると、戊と戌は同じく「土の陽」で、このように干支が揃うことを「比和」と称し、干支が相互に助長し合う関係にあるということです。昨今の国内外の情勢を見る限り、案外言い得ているかもしれませんが、いずれにしろ戊の気が勝ることを願うばかりです。昨年、本会創立三十周年の記念誌を発刊した関係で、今号は昨年の分と併せ、第三十・三十一合併号として発刊しました。ご了承いただければ幸いです。